

# 中学生の自己肯定感と人とのかかわりとの関連について Relation between Sense of Self-Affirmation and Interpersonal Relationship among Junior High School Students

久芳 美恵子 齊藤 真沙美\* 小林 正幸\*\*

## 問題と目的

他者とのかかわり方が未熟な子どもの増加は、多くの学校関係者の指摘するところである。「貸して」と言わず友だちの物を使う、人から何かしてもらっても「ありがとう」と言えない、唐突としか思えないような状況で感情の爆発を起こす等、このような子どもは校種を問わず特異な存在ではない。

子どものソーシャル・スキルや感情コントロールの稚拙さに起因する対人関係トラブルやストレスの増加、学校不適応の問題は至るところで指摘されている(小林, 2003<sup>7)</sup>; 大河原, 2004<sup>15)</sup>など)。

また、失敗を恐れて初めからやらない、一寸つまずくと途中で止めてしまう等、自信のなさや自己肯定感の低さもうかがえる。

これまでに、自己受容性と対人関係における研究は数多くなされており、それらの研究では、適度に自己受容している人は対人関係が円滑に進められ、積極的で良好な対人関係を構築できることが明らかにされている(名城, 1961<sup>10)</sup>; 加藤, 1977<sup>5)</sup>など)。竹田・倉戸(2003)は、自尊感情が学校内不安に及ぼす効果について検討し、自尊感情の一因子である自己肯定感が高い者は学校不安が生じにくいことを指摘している。この学校不安の中には「生徒関係不安」、「対教師不安」も含まれており、自己肯定感が人とのかかわりに与える影響についても確認されている<sup>19)</sup>。また、久芳・竹村(2004)は、高校生の自己肯定感と人とのかかわりの関連について検討し、自己肯定感が高い方が人とのかかわりもよいことを示している<sup>9)</sup>。しかし、小・中学生の自己肯定感を扱った研究は、大学生や成人を対

象としたものと比較して少なく、対人関係との関連を明らかにしているものはあまり見受けられない。

そこで本研究では、中学生を対象とし、自己肯定感と友人や家族、教師とのかかわりの関連を検討することを目的とする。

## 方法

対象：東京都の公立中学校6校に通う中学生(中1～中3)、計2506名。学年、性別の構成は、Table1に示した通りである。

Table 1 対象生徒の学年別・男女別構成

	中1	中2	中3	合計
男子	462	504	372	1338
女子	400	435	333	1168
合計	862	939	705	2506

手続き：以下の4種類から構成される質問紙調査を実施した。調査用紙は無記名で、学年と性別の記入を求めた。調査は、2002年6月～7月に担任教師の監督のもと、各学級で一斉に行われた。①「友人とのかかわり」尺度、②「家族とのかかわり」尺度、③「教師とのかかわり」尺度、④「自己評価」尺度。各8項目、計32項目、4件法。

## 結果と考察

### 1. 尺度の分析

#### ①「友人とのかかわり」尺度 (Table2-1)

8項目からなる質問紙に対する被調査者の反応に

Table 2-1 「友達とのかかわり」尺度の分析結果

質問項目	積極的	群れ回避	気づかい	共通性
1 自分から話しかけていく	.774	-.128	.019	.615
3 異性の友人と気軽に話をする	.756	.100	-.096	.591
8 友人になったら、その関係は長く続く方だ	.589	-.182	.177	.412
5 グループでいるより、少人数の方が付き合いやすい	-.033	.793	.053	.632
4 友人というより、1人の方が気持ちが落ち着く	-.179	.772	-.003	.627
2 友人の意見や行動に合わせる	.136	-.141	.734	.577
6 頼み事をされると、嫌でも断れない事がある	-.101	.114	.713	.531
7 相手や場面によって態度や考え方が変わる	.087	.397	.473	.389
固有値	1.827	1.475	1.073	
寄与率 (%)	22.835	18.434	13.411	
累積寄与率 (%)	22.835	41.268	54.679	

(主成分分析、バリマックス法)

Table 2-2 「家族とのかかわり」尺度の分析結果

質問項目	因子	共通性
5 親に学校でのことを話す	.780	.608
4 親を信頼している	.722	.521
3 親に悩み事を話す	.720	.519
2 親（父または母）と友達のように会話する	.700	.490
1 朝や寝る前に家族に挨拶をする	.673	.453
6 自分からは話をしない方だ	-.582	.339
7 きょうだいにいろいろな話をする	.484	.234
8 家の手伝いをする	.405	.164
固有値	3.328	3.328
寄与率 (%)	41.604	

(主成分分析)

ついて、バリマックス回転による主成分分析を行った結果、8項目、3因子が抽出された。第1因子は「積極的のかかわり」(以下「積極的」)、第2因子は「群れ回避」、第3因子は「気づかい」と命名した。

## ②「家族とのかかわり」尺度 (Table2-2)

8項目からなる質問紙に対する被調査者の反応について、主成分分析を行った結果、8項目、1因子が抽出された。

## ③「先生とのかかわり」尺度 (Table2-3)

8項目からなる質問紙に対する被調査者の反応に

ついて、プロマックス回転による主成分分析を行った。その後、どの因子にも負荷量の高い項目を削除し、再度分析を行った。その結果、7項目、2因子が抽出された。第1因子は「親近感」、第2因子は「敬意」と命名した。

## ④「自己評価」尺度 (Table2-4)

8項目からなる質問紙に対する被調査者の反応について、主因子法による因子分析を行った結果、8項目、1因子が抽出された。

「自己評価」尺度が1因子であることが確認され、この8項目は自分に対するポジティブな評価、捉え方

Table 2-3 「先生とのかかわり」尺度の分析結果

質問項目	親近感	敬意	共通性
1 先生とよく話をする方だ	.802	-.021	.634
3 悩みや不安を聞いてもらうことがある	.647	.061	.424
7 わからない事は質問する	.534	.273	.434
4 自分のことを話しにくい	-.522	.351	.302
8 敬語で話をする		.811	.620
5 先生を信頼している	.098	.778	.542
6 先生の話は注意深く聞いている	.356	.560	.653
固有値	1.951	1.894	
寄与率 (%)	27.871	27.057	
因子間相関係数 (r)	親近感	.255	
削除項目	(主成分分析、プロマックス法)		
2 会った時は挨拶をする			

Table 2-4 「自己評価」尺度の分析結果

質問項目	因子	共通性
4 自分には良いところがある	.788	.621
6 容姿に満足している	.675	.456
8 今の自分が好きだ	.670	.449
3 人には好かれる方だ	.648	.419
7 自分には「自分らしさ」というものがある	.633	.400
5 自分には誰にも負けないもの(こと)がある	.607	.369
2 運動ができる	.493	.243
1 成績が良い	.435	.190
固有値	3.147	3.147
寄与率 (%)	39.332	
	(主因子法)	

Table 3 自己肯定感(「自己評価」)の性差、学年差の分散分析・多重比較結果

	性差	学年差	交互作用	MSe
自己評価	F(1,2500)=31.516****	F(2,2500)=11.294****	n.s.	.331
	女子<男子	中3・中2<中1		

\*\*\*\*p<.001,\*\*\* p<.005,\*p<.01;p<.05

であることから、本研究においては、これを「自己肯定感」と捉えることとした。

## 2. 「自己肯定感」の性差・学年差の検討

「自己評価」の下位尺度得点を算出した。その際、自己評価が高い(「とてもそう」である)ほど、得点が高くなるように換算して、算出した。

被調査者の性別、学年別の「自己評価」下位尺度得点の平均値と標準偏差をそれぞれ算出した。

自己肯定感の性差、学年差を検討するために、「自

己評価」の下位尺度得点を従属変数として、性差、学年差の2要因分散分析を行った。結果は、Table3に示した通りである。性差・学年差に主効果が確認されたので、多重比較を行った(等分散が確認されたので、Tukey LSDを用いた)。

分析の結果、女子よりも男子の方が、中2・中3よりも中1の方が、有意に自己肯定感が高いという結果が得られた。

男子が女子よりも自己肯定感が高いことは、山本ら(2003)<sup>22)</sup>、久芳・竹村(2004)<sup>9)</sup>の研究においても示

されており、本研究結果もこれに合致する結果であるといえる。

また、宮沢（1998）の女子中学生を対象とした自己受容性に関する縦断的な研究によれば、自己承認が学年とともに低下することが指摘されている<sup>11)</sup>。Buhler, Ch. (1967)は、青年期前期を否定期、青年期後期を肯定期とし、否定期の特徴の1つとして反抗をあげている。しかし、自分自身に対する意気消沈、憎しみなどの形をとることもあることを指摘しており<sup>1)</sup>、中学生はこの否定期にあたると思われる。現実の自分の姿に向き合うことで、理想の姿とのギャップに直面する時期であるともいえるのではないだろうか。このことが、本研究における学年差に影響を及ぼしていると推測できるだろう。

### 3. 「人とのかかわり」と「自己肯定感」との関連の検討

「友達とのかかわり」、「家族とのかかわり」、「先生とのかかわり」の下位尺度ごとに下位尺度得点を算出した。その際、逆転項目は数値を逆転させ、それぞれの「かかわり」を行っている（「とてもそう」である）ほど、得点が高くなるように換算した。なお、「家族とのかかわり」尺度の「きょうだいにいろいろな話をする」において、「きょうだいはいない」と回答したものに関しては、数値を削除して、算出した。

「自己評価」尺度における被調査者の反応を性別、学年ごとに平均値の上下0.50SDの幅を基準として3群に分割し、「自己肯定感高群」、「自己肯定感中群」、「自己肯定感低群」とした。

被調査者の「自己肯定感」群別、性別、学年別の各下位尺度得点の平均値と標準偏差をそれぞれ算出した。

「友達とのかかわり」、「家族とのかかわり」、「先生とのかかわり」と「自己肯定感」との関連を検討するために、それぞれの下位尺度得点を従属変数として、「自己肯定感」の群間差、性差、学年差の3要因分散分析を行った。結果は、Table4-1に示した通りである。尚、主効果が確認されたものに関しては、Tukey LSD（等分散が確認された場合）、またはDunnettのC（等分散が確認されなかった場合）を用いて多重比較を行った。交互作用が有意であったものに関しては、単純主

効果の検定を行った（Table4-2～Table4-4）。

#### ①友達とのかかわり

「積極的かかわり」は、性差、学年差、群間差のすべてにおいて有意な主効果が確認された。男子よりも女子の方が、中2・中3よりも中1の方が、自己肯定感の低群よりも中群、中群よりも高群の方が、友達への「積極的かかわり」を行っていることが明らかになった。学年×性別×群の交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行ったところ、男子の中2において、低群・中群よりも高群の方が「積極的かかわり」を行っているという結果が得られ、他は上記と同様の主効果が確認された。

「群れ回避」は、性差、学年差、群間差のすべてにおいて有意な主効果が確認された。女子よりも男子の方が、中1・中2よりも中3の方が、自己肯定感の高群よりも中群、中群よりも低群の方が友達と群れることを回避していることが明らかになった。学年×群の交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行ったところ、中3においては有意な性差はなく、中2においては有意な群間差がないという結果が得られた。また、中1においては自己肯定感の高群・中群よりも低群の方が、中3においては高群よりも低群の方が群れを回避する傾向が強いことがわかった。

「気づかい」は、性差のみ有意な主効果が確認され、女子よりも男子の方が、「気づかい」を行っていることが明らかになった。性別×群の交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行ったところ、女子においては、自己肯定感の高群よりも中群・低群の方が「気づかい」を行っているという結果が得られた。

#### ②家族とのかかわり

「家族とのかかわり」は、性差、学年差、群間差のすべてにおいて有意な主効果が確認された。男子よりも女子の方が、中2・中3よりも中1の方が、自己肯定感の低群よりも中群、中群よりも高群の方が「家族とのかかわり」を行っていることが明らかになった。

#### ③先生とのかかわり

「親近感」は、性差、学年差、群間差のすべてにお

Table 4-1 「人とのかかわり」の「自己肯定感」群間差、性差、学年差の分散分析・多重比較結果

	性差	学年差	群間差	交互作用	MSe
友達積極的	F(1,2488)=7.995** 男子<女子	F(2,2488)=24.028**** 中3・中2<中1	F(2,2488)=170.147*** 低群<中群<高群	F(4,2488)=2.738* 学年×性別×群	.245
友達群れ回避	F(1,2482)=24.313**** 女子<男子	F(2,2482)=8.420**** 中1・中2<中3	F(2,2482)=13.235*** 高群<中群<低群	F(4,2482)=2.996* 学年×群	.544
友達気づかい	F(1,2486)=9.385** 女子<男子	F(2,2486)=.771 n.s.	F(2,2486)=1.702 n.s.	F(2,2486)=6.623** 性別×群	.253
家族	F(1,2488)=162.251**** 男子<女子	F(2,2488)=54.884**** 中3・中2<中1	F(2,2488)=112.507** 低群<中群<高群	n.s.	.292
先生親近感	F(1,2488)=7.322** 男子<女子	F(2,2488)=5.901** 中2<中3・中1	F(2,2488)=89.132**** 低群<中群<高群	n.s.	.244
先生敬意	F(2,2488)=1.217 n.s.	F(2,2488)=36.709**** 中3<中2<中1	F(2,2488)=61.332**** 低群<中群<高群	n.s.	.370

\*\*\*\*p<.001,\*\*\* p<.005,\*\*p<.01,\*p<.05

Table 4-2 友達「積極的」、友達「気づかい」の分散分析・多重比較結果

	学年差	群間差	交互作用	MSe
友達積極的	男子 F(2,1329)=13.435**** 中3・中2<中1	F(2,1329)=91.346**** 低群<中群<高群	F(4,1329)=2.485* n.s.	.262
	女子 F(2,1159)=10.954**** 中3・中2<中1	F(2,1159)=81.926**** 低群<中群<高群	F(4,1159)=1.345 n.s.	.225
友達気づかい	男子 F(2,1328)=1.242 n.s.	F(2,1328)=1.738 n.s.	F(4,1328)=1.440 n.s.	.266
	女子 F(2,1158)=1.708 n.s.	F(2,1158)=6.483** 高群<中群・低群	F(4,1158)=1.036 n.s.	.239

\*\*\*\*p<.001,\*\*\* p<.005,\*\*p<.01,\*p<.05

Table 4-3 友達「積極的」の分散分析・多重比較結果

	群間差	MSe
友達積極的 男子	中1 F(2,459)=47.803**** 低群<中群<高群	.279
	中2 F(2,501)=35.299**** 低群・中群<高群	.248
	中3 F(2,369)=16.269**** 低群<中群<高群	.259

\*\*\*\*p<.001,\*\*\* p<.005,\*\*p<.01,\*p<.05

Table 4-4 友達「群れ回避」の分散分析・多重比較結果

	性差	群間差	交互作用	MSe
友達群れ回避	中1 F(1,854)=5.556* 女子<男子	F(2,854)=10.618**** 高群・中群<低群	F(2,854)=.366 n.s.	.566
	中2 F(1,932)=23.454**** 女子<男子	F(2,932)=2.347 n.s.	F(2,932)=.122 n.s.	.521
	中3 F(1,696)=2.843 n.s.	F(2,696)=5.241** 高群<低群	F(2,696)=2.959 n.s.	.548

\*\*\*\*p<.001,\*\*\* p<.005,\*\*p<.01,\*p<.05

いて有意な主効果が確認された。男子よりも女子の方が、中2よりも中1・中3の方が、自己肯定感の低群より中群、中群より高群の方が先生に対して親近感をもったかかわりを行っていることが明らかになった。

「敬意」は、学年差、群間差において有意な主効果が確認された。中3よりも中2、中2よりも中1の方が、

自己肯定感の低群より中群、中群より高群の方が先生に対して敬意をもったかかわりを行っていることが明らかになった。

友達との積極的なかかわり、家族とのかかわり、先生への親近感をもったかかわりについては、いずれも男子よりも女子の方が得点が高いという結果が得られ

た。東京都立多摩教育研究所(1999)<sup>21)</sup>は、中学生の性格特性について調査し、男子よりも女子の方が、社交性が高いことを明らかにしている。本研究結果にもこのことが反映していると考えられる。女子は、男子に比べて社会的であるため、人とのかかわりを持ちやすく、人とのかかわりをよくもつため、より社会的になるという側面があるといえよう。

また、中学生を対象としたソーシャル・サポート研究において、友達、母親、きょうだいからのソーシャル・サポート知覚は、男子よりも女子の方が有意に高いという結果が得られており(岡安ら, 1993<sup>14)</sup>;尾見, 1997<sup>16)</sup>など)、本結果と合わせて考えるならば、「かかわっている」という認識が、ソーシャル・サポート知覚を高め、ソーシャル・サポート知覚が高いことがかかわりを強めているという相互作用的な面が考えられるだろう。これらの研究では、先生からのソーシャル・サポート知覚には性差が確認されていない。本研究においては、「敬意」には性差はみられなかったものの、「親近感」には有意な性差が認められた。これには、ソーシャル・サポートが一因子構造で解釈されていることと関連があると考えられる。川原(1994)は、効果が得られる教師サポートは、種類が限定されていると述べている<sup>6)</sup>。つまり、全般的なかかわりには、性差が見出されないが、かかわりを細分化した場合に、より親密なかかわりである「親近感」においては、女子の方が得点が高いという結果が見出されたといえるのではないだろうか。

友達とのかかわりにおいて、「群れ回避」と「気づかい」は、女子よりも男子の方が有意に得点が高いという結果が得られた。齋藤(1986)は、小学校高学年ころに見られる、外面的な同行動による一体感を特徴とする関係様式を「gang-relation」とし、友人関係の発達段階モデルを提示している<sup>17)</sup>。このモデルに基づいて調査研究を行った小林・齊藤(2003)は、女子より男子の方が、gangの関係様式を築くことを明らかにしている<sup>8)</sup>。したがって、群れることを好むはずの男子の方が群れを回避しているという本結果は、一見これと矛盾しているように感じられる。しかし、東京都立多摩教育研究所(1999)は、中学生女子において

は、グループへのこだわりが強く、グループの維持に多くのエネルギーを費やしていることを明らかにしている<sup>21)</sup>。このことを考慮すると、女子においては、グループを維持し、グループから外れないようにしなければいけないという強い思いから、群れを回避できないでいることが推測され、そのことが本結果に影響を及ぼしていると考えられることもできるだろう。中3においては、この性差が確認されなかったが、この点については、学年差と合わせて後述することとする。

これまでの研究においては、男子よりも女子の方が、友人関係において「気づかい」をする傾向が強いという結果が得られている(長沼・落合, 1998<sup>12)</sup>;東京都立多摩教育研究所, 1999<sup>21)</sup>など)。しかし、本研究結果は、これとは異なるものであった。先行研究における質問項目が「嫌われないように」「傷つけないように」というような不安の色濃いものであるのに対し、本研究の質問項目は、他者への配慮のソーシャル・スキルに近いものであったと考えられる。ゆえに、前述のようにグループ維持にエネルギーを費やす傾向の強い女子にとっては、当然の気づかいであるともいえよう。自己申告による質問紙調査であるため、そのような意識が、女子の得点を下げているとも推察できるだろう。

友達とのかかわりにおける学年差は、「積極的にかかわり」においては中1が、「群れ回避」においては中3が、得点が高いという結果が得られ、「気づかい」には学年差はみられなかった。中1は、小学校から中学校へと環境が移行し、友人関係の幅が広がる時期であるといえる。そのため、新しい関係を構築していく過程で積極的なかかわりは不可欠であると考えられる。また、先述の友人関係の発達段階モデル(齋藤, 1986)によれば、「gang-relation」の次の段階として、「chum-relation」(中学生ころに見られる、内面的な類似性の確認による一体感を特徴とする関係様式)、「peer-relation」(内面的にも外面的にも、互いに自立した個人としての違いを認め合う関係様式)が想定されている<sup>17)</sup>。中学生においては、学年が進むにつれ、gangの様式は減少し、chumとpeerの様式が増加することが明らかにされている(小林・齊藤, 2003<sup>8)</sup>)。このように友人関係が深まることによって積極的なかかわりを意識することが減少しているとも考

えられる。また、発達の進んだ高次な友人関係を築くようになるにつれ、物理的に群れることは減少する傾向にあるといえる。齊藤(2004)は、中学生において、学年が上がるにつれて「ひとりでいられる能力」を獲得することを示しており<sup>18)</sup>、このことも本結果に影響を及ぼしていると考えられる。

落合・佐藤(1996)は、青年期における友人関係の性差は、発達とともになくなる傾向にあることを示しており<sup>19)</sup>、前述のように「群れ回避」において、中3では性差がみられなかったことにも、友人関係の発達が関連しているといえよう。

一方で、長沼・落合(1998)は、青年期にはまだ十分に自我同一性を獲得していないことから、心理的な距離を置いた親密な友人関係を成立させることは困難であるとしている<sup>12)</sup>。齊藤(2004)も、中学生においては、互いの違いを認め合うpeerの関係を築くに至っていないことを指摘している<sup>18)</sup>。また、年齢が上がるにつれ、気の合わない人との友人関係は減少するが、学校組織ではそのようなことは難しいと考えられている(長沼・落合, 1998<sup>12)</sup>)。以上の点より、中学生の友人関係においては学年を問わず、友人関係において「気づかい」が必要であると考えられ、学年差は認められなかったといえるのではないだろうか。

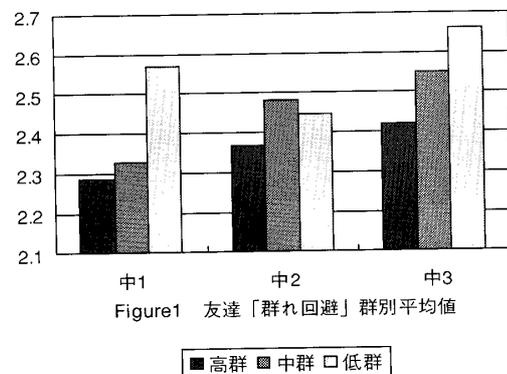
家族とのかかわりと、先生への敬意をもったかかわりについては、学年が上がるにつれ、得点が低くなる傾向がみられた。青年期は、「心理的離乳」「第二反抗期」などと呼ばれるように、大人から自立しはじめる時期であるといえる。したがって、親や先生に反抗し、人間関係の中心は友達に移行していくと考えられる(滝沢, 1994<sup>20)</sup>)。したがって、このことが本結果にも反映しているといえよう。

また、先生への親近感をもったかかわりについては、中2において、他学年よりも得点が低いという結果となった。中1では、小学校からの環境の変化に不安を感じており、中3では、多くの生徒にとって初めて経験することになる受験に対して不安を抱いていることが考えられる。このことが、先生へのかかわりを増加させているといえるだろう。「進路」という接点で教師と生徒が結びつくという結果は、高校生を対象とした久芳・竹村(2004)<sup>9)</sup>の研究と合致する結果である。岡安ら

(1993)<sup>14)</sup>の中学生のソーシャル・サポートに関する研究によれば、中2において先生のサポート知覚が最も低くなっており、本結果はこれを支持するものであるといえる。学校現場では、このことを考慮して接する必要があるといえるだろう。

自己肯定感の群間差を検討した結果、友達の「群れ回避」、「気づかい」以外のかかわりにおいては、自己肯定感の高い方が有意に人とのかかわりをもっているという結果が得られた。これは、適度に自己受容している人は対人関係が円滑に進められ、積極的で良好な対人関係を構築できる(名城, 1961<sup>10)</sup>;加藤, 1977<sup>5)</sup>)としている先行研究を支持する結果であるといえる。また、高校生の人とのかかわりと自己肯定感との関連を明らかにした久芳・竹村(2004)の研究<sup>9)</sup>、小学生の自己肯定感と対教師不安、生徒関係不安との関連を明らかにした竹田・倉戸(2003)の研究<sup>19)</sup>とも合致する結果となり、中学生においても、自己肯定感の高い方が対人関係が良好であるという、自己肯定感と人とのかかわりとの密接な関係が明らかになったといえよう。

注目すべきは、友達への「積極的かかわり」と「群れ回避」における群間差である。「群れ回避」については、中2では有意な群間差はみられず、中1、中3においては、低群の方が他群と比較して、群れを回避する傾向が強いという結果が得られた(Figure1)。前述したように、中1は、gang的な友人関係を最も築きやすい



時期であると考えられる(小林・齊藤, 2003<sup>8)</sup>)。また、友人関係の広がる時期であることから、中1においては、「群れる」ことに意味があり、これを回避する傾向のある子どもたちは、自己肯定感が低い可能性があることが示唆されたといえよう。先に述べたように、中学生は友人関係が発達する時期であるといえる。保坂・岡村(1986)は、仲間段階の発達段階で見ると、前の段階といわれるべき位相に変化が起こることがあると述べている<sup>1)</sup>。つまり、chumやpeerの関係が発達していくに伴って、「群れる」というgang的な体験をも体感していることが考えられる。性差がなくなっていることと同様、友人関係の発達に伴い、中3の「群れ」の意味は中1とは異なっていることが推察される。中2において、有意差がみられなかったことは、その移行期であるということが影響しているといえるのではないだろうか。したがって、中1においては、gang的な関係の「群れ」を十分に経験できていることが重要であり、友人関係が発達していけば、中3の段

階で新たな「群れ」を体感できると考えられる。ゆえに、この時期に群れを回避する傾向のある子どもたちは、自己肯定感を十分に獲得できていない可能性があるともいえるのではないのだろうか。

「気づかい」については、女子についてのみ高群において、「気づかい」の得点が低いという結果が得られた(Figure2)。男子に比べて女子の方が、友人関係において過剰な気づかいをしていることがこの結果に影響を及ぼしていると考えられるが、詳細は後述することとする。

#### ④自己肯定感と人のかかわりの相関の検討

自己肯定感と人のかかわりの関連をさらに詳しく検討するため、「自己肯定感」の因子得点と「友達とのかかわり」「家族とのかかわり」「先生とのかかわり」のそれぞれの因子得点との相関係数を算出した(Table5)。

いずれも先に示した群間差の分散分析結果を裏付ける結果が得られた。したがって、人のかかわりと自己肯定感との関連が示されたといえる。両者は自己肯定感が高いことで人のかかわりが良好になり、それゆえに自己肯定感が高くなるというように相互に影響しあっていると考えられる。

ここで、注目すべきは、友達への「気づかい」であるといえる。全体としては、「気づかい」と自己肯定感には有意な相関は見出されなかった。前述したように、この「気づかい」は、配慮のソーシャル・スキルとして人間関係を調整する意味があるためだと考えられる。男子は、女子に比べて友人関係において気づかいをしていないと考えられるわけだが、男子の気づかいは、自己肯定感との間には正の相関が見出された。つまり、気づかいをすることが人間関係を円滑にする方

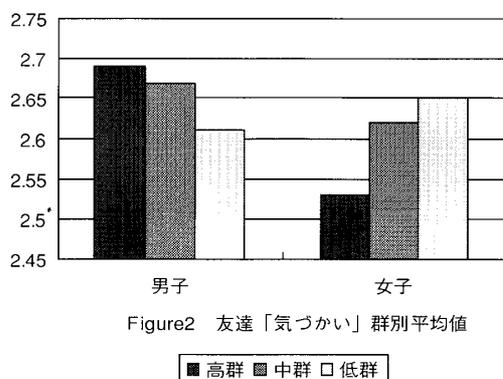


Table5 自己肯定感と人のかかわりとの相関

	全体	男子	女子	中1	中2	中3
友達積極的	.385****	.380****	.404****	.397****	.371****	.369****
友達群れ回避	-.071**	-.093**	-.059	-.121***	.011	-.099*
友達気づかい	-.010	.063*	-.118****	-.036	.051	-.046
家族	.281****	.316****	.320****	.293****	.298****	.225****
先生親近感	.286****	.286****	.305****	.339****	.297****	.209****
先生敬意	.250****	.267****	.244****	.271****	.250****	.197****

\*\*\*\*p<.001, \*\*\* p<.005, \*\*p<.01, \*p<.05

(相関係数:r)

向に作用していることが考えられ、それが自己肯定感を高めることと影響しあっていると見えよう。

一方で、女子の場合は、負の相関がみられている。性差の検討の際に述べたように、これには女子が、友人関係においてグループの維持に多大なエネルギーを費やし、気づかいをしていることが関連しているといえよう。適度な気づかいは必要であるが、過剰な気づかいは強いられることが、自己肯定感の低さと影響しあっていると考えられる。

中学生女子においては、chumの友人関係を築きやすいことが明らかになっている(小林・齊藤, 2003<sup>8)</sup>など)。保坂(1998)は、「仲間関係の変質と病理」の1つとして「希薄なチャム・グループの肥大化」を挙げており、この希薄さを補ってグループを維持するために「スケープゴート」を見出すことで集団を維持しようとするいじめの形があることを提示している<sup>3)</sup>。このことを合わせて考えるならば、女子の場合は男子とは異なり、群れを回避するというような目に見える形では顕在化しづらく、グループの中で、過剰な気づかいは強いられている可能性があることが推測される。藤田ら(1996)は、グループ化することにより「防衛」しており、一見周りから見ると、適応しているように見え、問題が表面化しない小・中学生の友人関係のあり方を示している<sup>2)</sup>。本結果は、特に女子においてこの傾向が強いことを示唆するものであり、援助する際に認識しておく必要のある1つの視点であるといえるのではないだろうか。

## 今後の課題

本研究においては、中学生の自己肯定感と人とのかかわりの関連についての検討を行った。今後は小学生についても検討し、発達の推移を視野に入れていく必要があると考えられる。

また、久芳・竹村(2004)は、自己肯定感と性受容の関連性も指摘しており<sup>9)</sup>、その視点も含めて、自己肯定感に影響を与える要因を明らかにしていくことが求められるといえよう。その上で、子どもが発達の過程で、自己肯定感を獲得していくために具体的にどのような支援が必要であり、効果的であるかということ

を模索していくことが今後の課題であると考えられる。

## 引用文献

- 1) Buhler, Ch. (1967) Das Seelenleben des Jugendlichen. Stuttgart : Gustav Fisher Verlag. (原田茂訳 (1969) 青年の精神生活 協同出版)
- 2) 藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳 (1996) 小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究—全国9都府県での質問紙調査の結果より— 東京大学大学院研究科紀要, 36, 105—127.
- 3) 保坂亨 (1998) 児童期・思春期の発達 下山晴彦 (編) 教育心理学Ⅱ 発達と臨床援助の心理学 第4章 Pp. 103—125.
- 4) 保坂亨・岡村達也 (1986) キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討—ある事例を通して— 心理臨床学研究, 4, 15—26.
- 5) 加藤隆勝 (1977) 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ, 14, 東京大学出版会
- 6) 川原誠司 (1994) 子どもを対象としたソーシャル・サポート研究の動向 東京大学大学院教育研究科紀要, 34, 245—253.
- 7) 小林正幸 (2003) 不登校児の理解と援助—問題解決と予防のコツ— 金剛出版
- 8) 小林正幸・齊藤真沙美 (2003) 小・中学生の友人関係の認識と学校適応感との関連について (1)—友人関係の様式の性差・学年差の検討— 日本カウンセリング学会第36回大会発表論文集, 131.
- 9) 久芳美恵子・竹村美砂 (2004) 自己肯定感と人とのかかわり 東京女子体育大学紀要, 3, 15—23.
- 10) 名城嗣明 (1961) 自己受容と他者受容の関係についての実験的研究 琉球大学教育学部研究集録, 5, 49—69.
- 11) 宮沢秀次 (1998) 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, 36, 258—263.
- 12) 長沼恭子・落合良行 (1998) 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35—47.
- 13) 落合良行・佐藤友耕 (1996) 青年期における友達

- とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 14) 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二(1993)中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
  - 15) 大河原美以(2004)怒りをコントロールできない子の理解と援助ー教師と親のかかわり 金子書房
  - 16) 尾見康博(1997)子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究 教育心理学研究, 47, 40-48.
  - 17) 齋藤憲司(1986)思春期における友人関係の変化 東京大学大学院教育研究科修士論文
  - 18) 齊藤真沙美(2004)小・中学生の友人関係の認識と教師の援助との関連についてー学校不適応予防の視点からー 東京学芸大学大学院教育学研究科平成15年度修士論文
  - 19) 竹田レイ子・倉戸ツギオ(2003)自尊感情が学校内不安に及ぼす研究効果 日本心理学会第67回大会発表論文, 1142.
  - 20) 滝沢三千代(1994)思春期・青年期の発達心理 伊藤隆二・橋口英俊・春日喬(編) 思春期・青年期の臨床心理学 駿河台出版社 第一章 Pp. 1-39.
  - 21) 東京都立多摩教育研究所(1999)中学生の友人関係に関する研究ーより良い生徒理解をめざしてー
  - 22) 山本ちか・氏家達夫・二宮克美・五十嵐敦・井上裕光(2003)中学生の社会的行動についての研究(4)ー中学生の自己概念についての検討ー 日本教育心理学会第45回総会論文集, 337.